
君がくれた物語

夕霧緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君がくれた物語

【Zコード】

Z8345A

【作者名】

夕霧紺色

【あらすじ】

ある日見上げた青い空。ふと思い出した、子供の頃の記憶。心のどこかに眠っていた懐かしい故郷…。

(前書き)

肩の力を抜いてから読んでください。

「コンクリートの塔に、あちこち切り取られた青空。ふと見上ると、真っ白な線が、空にひとすじ。」

飛行機雲。

君と一緒に、空を見上げていた。

堤防から見える空は、どこまでも広くて、見下ろした川面は青く輝いていた。

「どうして空が広いのか、知ってる？」

空を見上げたまま言つ君。

「…わからないよ、そんなこと。」

ソラって、漢字で書いて『ソラ』と書はれて。
僕は指で空中に『空』と書いた。

「それ、なんて読む？」

「ソラでしょ？」

君は首を横に振った。もう一つは？

「カラ？」

今度はうなずいてくれた。

「空って本当は、いつも地面と同じだけの広さしかないんだよ。でも……。」

中身がないて空っぽだから、広く見えているだけなんだ。君はそう言った。

飛行機が大きな音を立てて、一人の上に影を作る。

一筋の、白い飛行機雲。

「じゃあ、飛行機雲はどうしてできるのか、知ってる？」

君はまた、空を見上げたまま言つた。

僕は何も言わずに、君が話してくれるのを待つた。

「あれはさ、足跡なんだよ。」

なんの跡もついていない雪原に足跡をつけたい、って思うでしょ？空には何もないから、人は空に足跡をつけてみたいから、飛行機雲ができるのだ。

ふと見上げた空。

君の物語と、故郷の青空を思い出した。

いつも変わらずそこにある、何もない空。

白い足跡は、どこまでも長く続いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8345a/>

君がくれた物語

2010年10月25日02時20分発行